

令和三年度 学校推薦型選抜試験

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、表紙を含めて6ページあります。また解答用紙2枚と下書き用紙2枚が配付されています。
試験中に問題冊子や解答用紙、下書き用紙の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 3 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入してください。
 - (1) 受験番号欄
 - (2) 氏名欄
- 4 氏名、受験番号が正しく記入されていない場合は、採点できないことがあります。
- 5 試験終了後、問題冊子、下書き用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

コミュニケーションをとらえなおす

コミュニケーションの役割分担

「コミュニケーションには第一印象が重要だ」とよく口にするのも、**A**「しゃべるだけではコミュニケーションが成り立たないことを実感しているからだ。私たちは、さまざまな場面で周りの様子や自分の置かれている状況を察して、適切にふるまうように期待されているし、チームワークや共同作業について語るさいには、メンバーどうしの「あうんの呼吸」が、到達すべき理想の形として位置づけられることもある。これは、すでに述べた「コミュニケーションしないことの不可能性」を考えれば、当然のこととして理解できる。私たちの行動すべてがコミュニケーションだからである。

私が、コミュニケーションの現場としてまず思い浮かべるのは大学での教室の風景だ。講義では、自分がしゃべっている内容が、うまく受講生たちに届いているか、学生たちの反応を見ながら判断している。たとえば、学生たちの目線や頷きは、ひとつの手がかりになる。あらぬ方向を見ていたり、表情すら変えずにぼんやりと聞いていたりする学生を見ると、声を大きくしてみる。注意を引くつもりでも、結局は威圧感を漂わせて逆効果になってしまうこともある。ちよつとした冗談に笑いが起きれば、気をよくして、さらに話が脱線する。実際には、こちらの勝手な勘違いかもしれないのだが、頷いていれば、メッセージが「届いた」と感じ、目線が合えば、自分を「注視している」と思い込む。

多くの講義では、しゃべるのは教員で、聞くのは学生という役割分担がある。その役割分担によって、講義中に学生たちがしゃべる機会は限定されることになる。学生たちは、途中で手を挙げることもできるし、質問の時間があたえられることも少なくない。だが、講義の少なからぬ部分は、教員の話が占めることになるので、教員は、しゃべりながら学生たちの様子を絶えず観察し、講義を成り立たせている。つまりこの場合は、しゃべることのない相手を察することによって成り立っているコミュニケーションなのである。

状況で変わる察し合い

電子メールなどによるコミュニケーションの場合は、どうだろうか。時間的な余裕がない状況で、何かを決めざるをえないようなとき、「とくに反対意見がなければ、了承とみなします」という文言の電子メールが届くことがある。しばらく返信がなければ、本当に反対者がいないという扱いをすることはもちろん可能だ。だが、「しゃべるだけがコミュニケーションではない」という、これまでの議論をふまえると、**B**沈黙を「反対意見がない」というメッセージとして、単純に受け取ることに気づくだろう。

急いでいるときには、このような決め方が採用されることはあるが、じつは、「反対意見がない」のではなく、「反対意見を言えない」状況なのかもしれないからだ。沈黙こそが、

ささやかな反対意見の表明だと考えることもできる。あるいは、意見を言う以前に、何らかの技術的な理由で返信できないことさえある。このような場合、単純に反対意見がないとみなして決定してしまうと、あとでさまざまなトラブルが生じる可能性もある。つまり、同じ沈黙であったとしても、その意味や理由まで察することがなければ、コミュニケーションを十分に理解することは難しい。電子メールをはじめ、ソーシャルメディアなど、さまざまな方法でコミュニケーションが行われるようになってきている現在、私たちの察し合いも、より多様で複雑になっているのだ。

授業や電子メールにかぎらず、私たちのコミュニケーションは、さまざまな形で制約を受けている。もちろん、気後れしがちだったり、シャイだったりという個人的な性格や性向は無視できない。だが、コミュニケーションが行われる場所の特質そのものが、しゃべること、しゃべらないことを規定している点にも目を向ける必要があるだろう。

たとえば、コミュニケーション研究では「発話順序の交代 (turn-taking)」と呼ばれる側面に着目して調査研究を行うことがある。私たちは、相手がしゃべるのを聞き(その間はしゃべらない)、あるタイミングで、こんどは自分がしゃべる(その間、相手は聞いている)という、順序交代をくり返しながらか話をすすめている。コミュニケーションを「言葉のキヤッチボール」に見立てれば、わかりやすいだろう。「しゃべるのは、どちらの番なのか」について、お互いにその交代のタイミングを共有していれば、キヤッチボールは円滑にすすむ。その順序交代の理解、あるいは察し合いが、コミュニケーションのあり方を大きく左右することになる。

上述のとおり、教室では、しゃべる順序の交代が、かなり特殊な形で構成されていると考えることができるだろう。多くの場合、教員がひとしきりしゃべりつづけ、必要に応じて、受講生たちの番が来る。大げさに言えば、順序の交代がほとんど起きないように設計されたコミュニケーションなのである。

会議では、議事に沿って話し合いが行われ、発言者があらかじめ指定されていることが多い。しゃべることが許されていない、あるいはその順序がなかなかめぐってこない出席者たちは、まさに、しゃべることなくコミュニケーションを行う必要がある。自分の気持ちや意見を察してもらえないように、発話することなくメッセージを伝える必要がある。何度も時計に目をやれば、「時間が足りない」というメッセージを発することができ。困った顔をして天井を見上げれば、提案の内容に対して「気がすすまない」という態度表明になる。教員、あるいは司会者(議長)といった役割を担う人は、こうした「無言のメッセージ」を察しながら、講義や議事を進行することが求められるのである。

「空気」がコミュニケーションの流れを決める

以前、「KY^{ケイワイ}」という言葉が流行^{はや}った。「KY」は「空気を読めない」の略で、状況を察することのできない人を指す俗語である。「空気」を題材にした書籍も、たくさん出版されているようだ。すでに述べたとおり、私たちは、つねにお互いのことを察し合い、「無言のメ

「ツセージ」を読み取る努力をしながら、コミュニケーションを成り立たせている。その関係性をふまえると、「KY」は、まさにその協動的な試みを無にする存在だと言えるだろう。「KY」という言い方は、私たちが「空気」が読めるかどうか、重要な問題であることを認識していることの表れだ。もちろん、無邪気に自分が「KY」であることを宣言してしまえば、全体の流れに同調せずにはいられるということかもしれない。「空気」という言い回しは一般的だが、そもそも「空気」とは何なのだろうか。C「空気」は、私たちの意思決定の行方を左右する不思議な力を持つ。あとから説明を求められてもうまく答えようがないし、「空気」を理由にされた場合、私たちはなかなか反論しづらい。

先駆的に「空気」について考察した山本七平は、『「空気」の研究』のなかで、「空気」は絶対的な力を持った、魔物であるかのようにとらえている。山本は、私たちが、「空気」を（ある種の絶対的な）判断基準として受け容れながら意思決定を行っていることに触れ、つぎのように書いている。

だが通常この基準は口にされない。それは当然であり、論理の積み重ねで説明することのできないから「空気」と呼ばれているのだから。従ってわれわれは常に、論理的判断の基準と、空気の判断の基準という、一種の二重基準ダブルスタンダードのもとに生きているわけである。そしてわれわれが通常口にするのは論理的判断の基準だが、本当の決断の基本となっているのは、「空気が許さない」という空気の判断の基準である。

私たちが、コミュニケーション過程の理解を試みるとき、この「論理的判断の基準」と「空気の判断の基準」という二重基準の存在を覚えておくことはきわめて重要であろう。というのも、本書でも扱っているのは、会議や講義など、ある程度の目的や方向性を問われるコミュニケーションだからである。何らかの意思決定が求められたり、何かを教えたりするコミュニケーションにおいて、空気の判断基準はどのような役割を果たすのだろうか。そして、もういっぽうの論理的判断基準について、私たちはどのように向き合えばいいのだろうか。

二つの判断基準

おそらく、実際のコミュニケーションの過程では、これらの二つの判断基準は、あらかじめ明確に区別されているわけではない。私たちのコミュニケーションは、複雑な過程であるから、それぞれの基準が、コミュニケーションのことなる側面を際立たせると考えたほうがいいだろう。たとえば会議を開くにあたって、私たちは事前の準備をすすめる。資料を整え、議事を整理しておく。時間配分にも気を遣いながら、全体の構成を検討する。会議の進行は、（程度の差こそあれ）事前に計画されることが多い。大学における講義もろもろの準備も、おそらくは似たようなものだろう。これらの、いわゆる「段取り」と呼ばれる諸々の準備や現場での実践は、論理的な判断基準で評価できるように見える。事前の一連の計画をひとつの「シナリオ」として理解すれば、その「シナリオ」どおりにコトがはこんだかどうかでコミュニケ

ーションを評価することができるからだ。つまり、いつ、誰が、どこでどのような発言をしたか、必要な事項が資料に記載されていたか、時間配分は適切であったかなど、記録やデータに照らして、会議や講義の成否を語ることはできる。

しかしながら、コミュニケーションの現場は、じつに複雑である。予期せぬことが頻出することを、読者の多くは体験的に知っているだろう。私たちのコミュニケーションは、詳細な「シナリオ」どおりにはいかず、あとから説明しえないような展開も、めずらしくないのだ。コミュニケーションの最中には、まさに「コミュニケーションする」ことに注力せざるをえない。コミュニケーションは、絶え間ない過程で、一つひとつのやりとりをじっくり考えたり、ふり返ったりする余裕はない。そして、微妙な「空気」の変化をその時・その場で感じ取り、いわば即興的に反応している。話をすすめているなかで、なんとなくよい感触が得られたり、雲行きが怪しさを感じたりすることはできるが、「空気」の変化を予測するのは難しい。

D 大切なのは、論理的判断基準と空気の判断基準という、二つの判断基準が併存していることを理解したうえで、私たちのコミュニケーションを考えるとということである。論理的判断基準だけで会議の進行を押し切ることはできない。強固な支配力を持っているとはいえずべてを「空気」に委ねておくわけにもいかない。その時・その場の「空気」を変えること、そして論理的な判断基準に照らしてコミュニケーションを理解することも重要なのである。その意味で、これらの二つの基準は相互に関連している。

私たちは、つねに「空気」を醸成することに関与している。いつでもコミュニケーションせざるをえないという状況は、私たち自身が「空気」をつくり出し、さらにその「空気」の影響を受けるということにはかならない。誰かの曇った顔は、自分を不安にさせ、それがおそらくは部屋じゅうに「伝播」する。逆に、明るく楽しいプレゼンテーションを聞けば、時間を忘れて議論に熱中する。つまり、「空気」は、私たちのコミュニケーションの所産として理解することができる。コミュニケーションの特質をさらに理解するためには、私たちがふだんどのようにメッセージを發し、それを察した人びとが、どのようにそのメッセージ（時として無言の場合もある）に向き合うのかについて考えておく必要がある。

（加藤文俊、『会議のマネジメント』、中公新書、二〇一六年より抜粋、一部改変）

コミュニケーション理論の研究者として知られるポール・ワツラヴィックらは、私たちがコミュニケーションについて語るさいに前提となる基本的な考え方として、「コミュニケーションしないことの不可能性(One cannot not communicate)」を挙げている。私たちは、コミュニケーションせずにはいられない。つまり、人間の行動すべてが、あらゆる種のコミュニケーションだという考えである。

問1 傍線部 **A** について、「しゃべる」以外のコミュニケーション成立要素として、著者が具体的に述べていることがらについて、40字以内で要約しなさい。

問2 傍線部 **B** について、著者は、なぜ問題だと指摘しているのか。60字以内で述べなさい。

問3 傍線部 **C** について、本文を参考に190字以内で説明しなさい。

問4 傍線部 **D** について、医療におけるコミュニケーション場面ではどのようなことが考えられるか。さらに、医療職を目指すあなた自身のコミュニケーションについてどのようにとらえているか。以上2点について、あなたの考えを500字以内で述べなさい。

正解例と採点のポイント

問1

出題のねらい…コミュニケーションの成立要素について、本文から要点を見出し、適切な文章で明示できる能力を確認することが出題の狙いです。

解答のポイント…コミュニケーションの成立要素として、本文からの単なる抜き書きではなく、「相手を観察したうえで行動すること」について記述されている部分を指定された文字数で要約できていることが求められます。

正答例

「状況を察して適切にふるまったり、相手の反応を見ながら判断したりして行動すること」(39字)

「相手の様子を絶えず観察し、しゃべることのない相手の反応からその意図を察すること」(39字)
など

問2

出題のねらい…コミュニケーションの背景について、その複雑さを文脈から理解することができる能力を確認するのが狙いです。

解答のポイント…コミュニケーションを十分に理解するためには、状況の意味や理由までを察することの重要性について文脈に沿って記述できていることが求められます。

正答例

「同じ沈黙であったとしても、その意味や理由まで察することがなければ、コミュニケーションを十分に理解することは難しいため」(58字)等

問3

出題のねらい…コミュニケーション過程における「空気」の介在について、論理的に理解することのできる能力を確認するのが狙いです。

解答のポイント…次の①～④について示されていることが求められます。

①コミュニケーション過程において、「空気」は、絶対的な力を持った魔物であるかのような存在である。②私たちは「空気」を(ある種の絶対的な)判断基準として受け容れながら意思決定を行っている。③「空気」は論理の積み重ねで説明することができないものである

ため、通常「空気の判断の基準」が口にされることはない。④意思決定において本当の判断の基本となっているのは、「空気が許さない」という空気の判断の基準である。

正答例

「コミュニケーション過程において、「空気」は、絶対的な力を持った魔物であるかのような存在であり、私たちは「空気」を（ある種の絶対的な）判断基準として受け容れながら意思決定を行っている。「空気」は論理の積み重ねで説明することができないものであるため、通常「空気の判断の基準」が口にされることはないが、本当の判断の基本となっているのは、「空気が許さない」という空気の判断の基準である。」（189字）等

問4

出題のねらい…本文を読み、このような課題について身近な問題として捉え、自身の考えを述べることができる能力を確認するのが狙いです。

解答のポイント…次の①及び②について示されていることが求められます。

①二つの判断基準が併存していることについて、医療におけるコミュニケーション場面を想定した場合の自身の考え。②医療職を目指す自身のコミュニケーション能力に対する自己分析（課題や目指す方向性等）。